

学位論文審査結果の要旨

博士課程 甲	第 号	氏 名	明野 慶子
審 査 委 員		主 査 氏 名	七島篤志
		副 査 氏 名	梶本政博
		副 査 氏 名	大澤 健司
<p>[論文題名]</p> <p>Cerclage in surgically shortened uterine cervix and pregnancy outcome: A retrospective comparison between the abdominal and vaginal procedures</p> <p>経腹的・経腔的子宮頸管縫縮術に関する後方視的研究</p> <p>[要 旨]</p> <p>【背景】子宮頸管無力症に施行される子宮頸管縫縮術では、経腹法は子宮頸部の短縮や裂傷により経腔法が困難な症例が適応となる。若年女性に子宮頸部異形成や子宮頸癌が増加しており子宮頸部円錐切除術を施行後の妊娠では、切除体積に比例して流早産率が上昇する。先行妊娠で流早産に至った症例の研究はされているが、子宮頸部円錐切除術後の報告は少なく、同手技術後の妊娠における経腹法と経腔法の比較検討を行った。</p> <p>【目的】子宮頸部円錐切除術後の妊娠症例における経腹法と経腔法の比較検討を行い、予後や予後にかかわる因子を明らかにする。</p> <p>【方法】2008年から2020年までに宮崎大学医学部附属病院で管理した子宮頸部円錐切除術後の子宮頸管縫縮術施行症例（経腹法14例、経腔法18例）を対象とし、後方視的二群間比較研究を行った。母体情報および新生児情報について統計学的解析を行った。</p> <p>【結果】術前の子宮頸管長の中央値は、経腹群20.0mm、経腔群31.0mmであり、経腹群で有意に短かった($p < 0.01$)。また、術前の腔分泌物培養は、経腹群でGardnerella陽性例が多い傾向にあった($p = 0.073$)。37週未満の早産率に有意差は認めなかった。非劣性重回帰分析では、経腹法は子宮頸管長の有意な短縮を認めるものの、経腔法と比べ分娩時妊娠週数に有意差は認めなかった。</p> <p>【結論】子宮頸部の短縮などで経腔法が困難な症例に対しても、経腹法を施行することで同等の予後が得られた。本研究成果は学位論文に値すると判断した。</p>			

最終試験結果の要旨

博士課程 甲	第 号	氏 名	明野 慶子
審 査 委 員		主 査 氏 名	七島 篤志
		副 査 氏 名	加藤 敏行
		副 査 氏 名	大塚 健司
<p>【要 旨】</p> <p>【論文】 Cerclage in surgically shortened uterine cervix and pregnancy outcome: A retrospective comparison between the abdominal and vaginal procedures. 経腹的・経腔的子宮頸管縫縮術に関する後方視的研究</p> <p>【背景】子宮頸管無力症に施行される子宮頸管縫縮術では、経腹法は子宮頸部の短縮や裂傷により経腔法が困難な症例が適応となる。若年女性に子宮頸部異形成や子宮頸癌が増加しており子宮頸部円錐切除術を施行後の妊娠では、切除体積に比例して流早産率が上昇する。先行妊娠で流早産に至った症例の研究はされているが、子宮頸部円錐切除術後の報告は少なく、同手技術後の妊娠における経腹法と経腔法の比較検討を行った。</p> <p>【目的】子宮頸部円錐切除術後の妊娠症例における経腹法と経腔法の比較検討を行い、予後や予後にかかわる因子を明らかにする。</p> <p>【方法】2008年から2020年までに宮崎大学医学部附属病院で管理した子宮頸部円錐切除術後の子宮頸管縫縮術施行症例（経腹法14例、経腔法18例）を対象とし、後方視的ニ群間比較研究を行った。母体情報および新生児情報について統計学的解析を行った。</p> <p>【結果】術前の子宮頸管長の中央値は、経腹群20.0mm、経腔群31.0mmであり、経腹群で有意に短かった($p < 0.01$)。また、術前の腔分泌物培養は、経腹群でGardnerella陽性例が多い傾向にあった($p = 0.073$)。37週未満の早産率に有意差は認めなかった。非劣性重回帰分析では、経腹法は子宮頸管長の有意な短縮を認めるものの、経腔法と比べ分娩時妊娠週数に有意差は認めなかった。</p> <p>【結論】子宮頸部の短縮などで経腔法が困難な症例に対しても、経腹法を施行することで同等の予後が得られた。上記申請論文の内容および関連領域について口頭で試問した結果、学位を授与するに値する学力を有するものと認定した。</p>			